

7月5日に三度目のスペイン巡礼行から帰ってくる、辺りは濃い緑に覆われていました！  
 時差ボケの残る中、桃の買い出しに行ったり、仕込みをしたり、少しずつ夏のモードに切り替えて行かなければ・・・と気持ちを引き締めています。  
 今号は、4月の末に行った伊豆の山。そしてスペイン巡礼の道、そしてまたまた渡嘉敷先生の力作、と読み応えある内容と思います！

# 千年のブナ林

## 伊豆山稜線歩道を歩く



4月27日 八ヶ岳の頼もしいガイドの一人、キャンプロース・アウトドアサポートを主宰する中島和也さんから「伊豆の稜線歩道を歩きますか？」というお誘い。伊豆は遠いような気が

していましたが、朝5時高根図書館に集合、夜の9時位には帰って来られるとのこと、しかも車の運転は中島さんがしてくれるので、楽ちゃん？

しかし、コースはどうだろう？  
 キビしいコースなら皆さんの足を引く張つても申し訳ない、途中リタイアして、自分たちで帰ってくるのも大変そう・・・とはじめはちよつと躊躇しましたが、「大丈夫ですよ。アップダウンもそれほどないし、ゆつくりのトレッキングですから」との言葉を聞いて参加することになりました。

### ブナの大木に目を見張る

早朝まだ辺りが真っ暗な中、八ヶ岳を出発、伊豆へ向かいました。途中、今回のトレッキング

グに参加する2名の方と合流、スタート地点を目指しました。「それほど高い山がるわけでもないのに伊豆は深い」との思いを新たにすると、天城隧道手前の駐車場に到着。

トンネルのすぐ脇から山道に入り、歩き始めて早くも息が上がります。内心不安が胸を過ぎましたが、20分ほどで稜線の尾根に出ました。そこで迎えてくれたのはブナの大木！圧倒されるような佇まいです。ここからは暫くは多少のアップダウンはありましたが、ほぼ平坦な尾根道だったので、ひと安心。右が切れ落ちた崖下から伸びたホウの木を上から見下ろします。高木で普段は見上げることしかできないホオの木の芽吹きと新緑の優しい色合いに目を奪われました。

### ガイド仲間はすてき♪

スタートから1時間ほど歩いていくと、前方から人の声が聞こえてきました。中島さんが「やあ、結構早かったね」と呼びかけました？？？

なんと！ガイド仲間の女性2人でした。彼女たちは私たちの逆コースを歩き、スタート地点に置いてある中島車をゴール地

点まで回送してくれるとのこと！  
 素晴らしい！

途中右側が広範囲に崩落しているところがあり、一人ずつ慎重に通過。ここはちよつと緊張しました。しばらく進むと、三蓋山。ここでお昼です♪「紅茶ハーブティーもありますよ♪」うれし♪

山のランチタイムは本当に贅沢な時間です。  
**山を歩いて・・・海！！**

これでまだ元気に歩けそう？  
 ブナの大木と桜の古木が見事な広場。桜は枝が折れて土に埋もれ、そこからまた枝が伸び、花が咲いていました。自然の生命力には本当に感心します。頭上は馬酔木のトンネル足元は桜の花びらの絨毯！いい道です♪

猫越岳（ねつこだけ）山頂には池があり、少し行くと展望台。ここからは西伊豆の山々、その下には海が広がっているようですが、この日は雲の海でした。それもまた良し。

千年の歴史を感じさせるブナの大木、みずみずしい新緑の森、鈴なりの馬酔木の花、ツツジやギンリョウソウ、・・・そして山の稜線を歩いてきて、海が待っているコース、さすが伊豆です！きつと違う季節もいだろうな♪  
 ゴールの仁科峠には中島車がちゃんと待っていてくれました！

# スペイン巡礼の道 XII



19日目 7月2日(火) 26km  
 さえぎるものがない

### メセタの大地

★サンボルイテロ・デラ・ペガ  
 全行程を歩いた人たちの多く(?)が、印象に残った所として「ピレネー山脈越え」と、この「メセタの大地」をあげるといいます。

確かに！サンボルからの巡礼路はとても長く、地平線まで続く麦畑の中の道でした。ギラギラと照り付ける真夏の太陽に、麦の穂が金色にキラキラ輝いていてまるでゴッホの絵のようです。

まったく木陰はありません。遙か前方に見える丘、「あそこまで行けばその向こうに次の町が見えると思う・・・」

がッ!!丘を登りきった先に見えたものは、またしても地平線まで続いているかと思われ一本の路！多めに持ったはずの水も心細くなり、木陰で休もうにも木の1本もありません！精魂尽き果てるかと思われた頃、周りに3〜4本の木が立つ「泉」に辿り着き、その水で足を洗い、体をふぎ、生き返りました。し

かしまだまだ道は続きます。ようやく前方に一軒の建物が見えました。「どんなところでもない。今夜はあそこで泊まるう」と建物の中に入っていくと・・・なんと、断られてしまいました！そこは教会が運営する小さなアルペルゲで、もういっぱいのこと！

「ぞんなく・・・」入口の脇のベンチにへなへなと崩れ落ちました！「オンリーウノキロ先に街があり宿もある」「水でも飲んで行け」とお水をくれました。(はあく・・・ため息) 「ウノつて1kmってこと？行くしかないか・・・」仕方なくヨロヨロ歩き始めました。疲れ果ててたどり着いた街の入口にあったオスクリに転がり込みました。

### 運河沿いの道

20日目 7月3日(水)

★イテロ・デラ・ペガ・フロミスタ  
 あんなに疲労困憊したのに、一晩寝たら、よし歩か！という気持ちになれるのが不思議です。他にすることはないとはいえ・・・途中から運河沿いの道で気持ちがいい。宿で洗濯物を中庭に干して建物に入るときにつまずいて転んでしまいました。やつぱり疲れているのかな？さあ明日がいよいよ今回のゴール。一步一步、かみしめて歩こう！  
 (次回1回目の最終回)



# 風の通り路

山梨県北杜市小淵沢町10122  
 0551(36)3826 ペンション風路



サネカズラは低山の秋が深まると、赤くみずみずしい実を見せる。人知れず葉隠れに真っ赤に染まるサネカズラは実に可愛らしい。サネカズラを「美男カズラ」ともいうが、「美女カズラ」と呼んでも良いのにと思ったりする。

秋に赤い実をつける植物には、オモト、ヤブコウジ、センリョウ、マンリョウ、コブシ、アオキ、イイギリなどかなり見られるが、樹上に垂れ下がる優美な実はサネカズラのほかにはない。それだけに赤く熟したみずみずしい果実はひととき目につく。

サネカズラの「サネ」は実のことで、なるほどと納得する。

### 1 実のしくみ

果実の粒々はやがて黒く変わって、ばらばらになる。干した果実は中国の五味子(ゴミシ)の代用として強壯剤や咳止めに用いられた。

果実は特異な仕組みで、ホオノキやコブシなどのモクレン属に共通する特徴をもっている。サネカズラは今ではマツブサ科になっているが、つい最近までモクレン科に含められていた。

多数の赤いつぶは、子房のむきだしになった一個の果実である。その粒状の果実は円くふくらんだ花床につき、子房と花床を合わせて一個の果実のように見える。このような仕組みを「集合花」と呼び、キツネノボ

タンの実に似ている。サネカズラの花床の基部には8〜17枚の花弁のようなもの(花被片)があつて、肉質の花床を取り囲んでいて、その花被片は黄白色でやや厚みがある。

サネカズラは雌雄異株でこの点はモクレン科と異なるが、集合花の螺旋状の仕組みや花被片などの仕組みは、モクレン科に共通しており、これらの「多心皮類」は最も原始的な被子植物と考えられている。

### 2 蔓の粘液

サネカズラは薬用植物として有用であつたが、なお一層重用だつたのは、髪油や糊料の原料になる枝蔓の粘液である。この利用が暮らしにいかに関与していたか、その度合いは方言名に残され、ピンツケカズラ、ビジンソウ、ビナンセキなどの名からも伺える。

サネカズラは山野にごく普通に見られ、蔓をいつでも採取でき、髪油の製法も容易で、ふんだんに使うことができた。サネカズラから得られる粘液は、かつては前髪を整えるのに、またちよん鬘を結うのに欠かせないものであつた。サネカズラの別名に「美男カズラ」の名もあるが、整髪材として使っていたのは男衆に限った訳ではない。女性の前髪にも是非とも必要であつたという。

ところで、粘液はどれほどの油分を含んでいるのか、試しに枝蔓を水に浸してみた。切った若い蔓を一晩水につけると、切り口にぬるぬるした液が出ていた。粘液は樹皮の内面に含まれていて、樹脂の一種なのだろう

が、油というよりオクラやヤマノイモで見られるぬるぬるした汁(粘質物の成分はキシログルクロンド)である。なるほど、方言名にトロカズラの名が残るのもうべなるかな。髪結いを使うにも、その後は水洗いで容易に落ちるので使いやすかつた事であろう。

### 3 連れ添う蔓

蔓は生長すると太さ2センチほどに太くなる。牧野富太郎博士の記録によると、「根元の太さ周囲九寸(27cm)、根元から一尺五寸(45cm)許り上の所で周囲五寸六分(17cm)のものがあつた」という。古い蔓はコルク層が発達し手ざわりが柔らかくなり、粘液は含まれていない。

蔓は特殊な粘液から、物として暮らして直接役立つが、一方で蔓(かずら)は古人の思いを呼び覚ます詩材として大き

な存在でもあつた。

さね蔓のちも逢はむと

夢のみに

祈誓(うけ) ひわたりて

年は経につつ

万葉集卷十一

あしひきの

山さな蔓もみづまで

妹に逢はずや

吾が恋ひ居らむ

万葉集卷十

サネカズラ、サナカズラに「逢はむ」「逢はず」を重ねたのは、蔓の巻き方を見ているからである。それぞれの蔓が伸びていって、その先でお互いが「絡み合う」そのさまを捉え、「出逢い」に重ねている。出逢いは当然恋のそれである。

サネカズラに似た蔓の巻き方は、フジ、スイカズラ、クズ、ネナシカズラなどにも、しばしば見られるが、概してネナシカズラやフジの蔓は締め付けあつて、厳しくてゆとりがないように見える。クズは長く広く伸びて、蔓同士は巡り合う機会が少なく、スイカズラは樹木など他物に高くよじ登る方に懸命なように、蔓の出合いは少ない。サネカズラの2本の蔓の遭遇は、絡み合いながら両者の間はがんにがらめにはならず、むしろ余裕があるように見える。それに、

蔓のまたの出逢いがフジよりもスイカズラよりも数少なく、それが反って情感を高めているのではなからうか。かずらの類を改めて観ると、どうやらサネカズラの蔓こそ、恋の出逢いに相応しく、またしても古人の鋭い観察力と豊かな想像力に感心する。

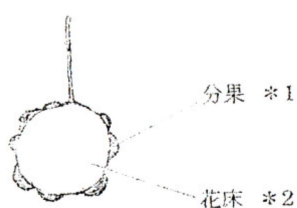
### 4 和名考

果実ほどの植物にも必ず結ばれるのに、「実||さね」をあえてサネカズラに当て、その語源になつたのはなぜかというところ、サネカズラの果実はみずみずしくて肉質の部分がみられるからであろう。植物界の見方では、実の部分はなくて種子だけといった植物はまずないのだが、一般の見方では、通常アザミやタンポポのように乾いて瘦せた小さな果実は「種||たね」と言っている。また果皮の一部が翼状に広がったものも、全体が痩せて見えるせいも、果実というよりも、種子と受け止めやすい。植物学ではカエデ属、トネリコ属、ヤマノイモなど、翼があつて痩せている果実を「翼果」と呼んでいる。一方、一般には、カキ、ナシ、ミカン、アケビやブドウなど、果皮や花床などが発達して厚くなった大柄の果実を、当然ながら「実」と呼んでいる。

このような受け止め方からして、サネカズラは円く柔らかい花床とみずみずしい粒が目立つので、

立派な「実(さね)」と視たのであろう。

時代を振り返ってみると、豊かな緑にとりかこまれて生きた古人の暮らしの中で、サネカズラのかかわりは深く、樹皮からの粘液の採取が最も重用であつたことは改めて言うまでもない。とは言え、野に赤く熟した果実の美しさにも、心惹かれたことであろう。秋の野山は諸所に赤い実が目を見えなかく、とりわけサネカズラは小柄ながら、しみじみとした味わいを見せる。晩秋から初冬にかけて、サネカズラの実には派手さがなく、むしろ、そこに落ち着いた趣がある。



集合果の断面図\*3

\*1 分果―赤く熟す

\*2 花床―球状の柔らかい液果になる。

\*3 集合果―1個の花に多数の雌しべがあつて、それぞれの子房が分果になる。